手紙

大島健吾

［登場人物］
男、女

明転すると、椅子に座った男１と女１。机があるといいが、なくても芝居はできる。

女１　桃子さんの、旦那さまですか。
男１　はい。
女１　突然お呼びだてして、申し訳ありません。
男１　いえ・・・
女１　この度は、ご愁傷さまでした・・・
男１　恐れいります。
女１　私、桃子さんの看護をさせていただいてたんです。
男１　あ、はあ・・・
女１　桃子さんは、とても強い方でした。すごく痛かったはずなのに、私達には泣き言ひとつ言わず。

女１は手紙を出し、男に見せる。

男１　これは？
女１　桃子さんからの、手紙です。亡くなる３日前に、私に。
女１　読んで下さい。
女１　では、失礼ながら。（手紙を読む。）

コウくんへ
この手紙を、コウくんが読む頃には、私はもうこの世にいないかもしれません。
先に、死んじゃって、ごめんね。つらいです、つらいよ・・・

隠していたことを、コウくんに話さなければなりません。
私、ピンクに変身することができるのです。
（男と目を見合わせ、間をとる）エッチな話ではありません。

私は､およそ２５００万人に１人の確率で生まれる､｢レンジャー遺伝子｣を持っています。
だから、ピンクレンジャーに変身することができるの。お母さんからは､｢その力は誰にも

見せちゃいけないよ」って言われてました。

私、お母さんから、それはそれは厳しい訓練を受けました。

メニューを書いておくね。
毎日、トリプルアクセル１００回、トリプルサルコウ・ダブルトゥループを１００回、股裂きからのアンクルホールド１００回などです。
覚えておいてね。

大学で、コウくんと私は出会ったね。一目惚れでした。わたしから、コウくんに告白したね。どんなに、心臓がばくばくしたことか、コウくんは知らないでしょう？
コウくんからＯＫをもらったとき、気持ちが昂ぶりすぎて、思わずピンクに変身しそうになってしまうのを、必死におさえて、走り去ってしまいましたね。なつかしいです。

私、大学卒業後、普通に就職するか、ピンクレンジャーになるか、なやみました。そんなとき、コウくんは言ってくれたね。
「桃子ちゃんは、桃子ちゃんなりの生き方があるよ」

私、こっそり、ピンクになりました。
五反田を守る、五反田マンのピンクとして、精一杯五反田を守りました。

私達は結婚して、ヒロちゃんが生まれて、私、幸せでした。
その他のことは、コウ君が知っているとおりなので省略するね。

ヒロちゃんは、私の遺伝子を引き継いでいます。
このまえ、寝返りができた瞬間に、ピンクに変身してしまった・・・
（たっぷり間）ヒロちゃん、男の子なのにね・・・心配です。
どうか、よろしくね。

コウ君と、まだ、ずっと、一緒にいたかった。
でも、わたし、幸せでした。本当に幸せでした。
でも、コウ君、将来、好きな人ができたら、私のこと、忘れてもいいからね。

追伸、お母さんが私に施したメニューは、たかちゃんが３歳になったらはじめてください。

女１　　・・・以上です。
男１　　桃子・・・(号泣)

溶暗。おわり。